

企業名：三井化学

レポート名：三井化学レポート 2021

1. この会社が目指す姿が理解できるか

極めて理解しやすいと考える。

統合報告書の初めに「VISION2030」と題された次のようなページが位置している。



日頃私たちが実感できている通り、近年は新型コロナウイルスのパンデミックなどが発生したり、世界の情勢が大きく変化したりと「変革」の時代であることに疑いない。こうした中でどのようなコンセプトで会社の運営を行なっていくかというコンセプトが「2030年」を意識して設定、紹介されている。資料を通覧しただけでも三井化学がどのような将来に向けてのビジョンを持っているか理解できる。

2. この会社の競争優位性が理解できるか

極めて理解しやすいと考える。

三井化学の競争優位性は、企業自身が100年以上の歴史を持ち、その中で培われた技術力、関連企業との連携、強い顧客基盤にあると言えるだろう。これに関しては資料の中で図を用いて詳細かつ明瞭に解説がなされている。

長い歴史の中で培われた技術力の現れとしてその事業範囲の広さが印象に残る。



メインであるモビリティに加えて、サブのセグメントとしてのヘルスケア、フード&パッケージング、基盤素材、そして現在取り組んでいる新規の事業が複数存在することが確認できる。以上の観点から、三井化学の持つ競争優位性は長い会社の歴史の中で培われたナレッジや他者（他社）との関係、そしてそこからくる幅広い事業の幅であると理解できる。

3. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか

上で触れた2点ほど直接的な解説はないものの、資料を読み取れば十分に理解できると考える。

三井化学の競争優位性については上で述べたように「長い会社の歴史を前提とする事業の幅の広さ」である。この競争優位性が持続するものかどうかという問いに関しては「持続する見込みが極めて高い」という答えが妥当であるだろう。まずなにより、前提となる「長い会社の歴史」というのは新興の企業には真似のできない優位性であることに間違いはない。さらに「幅広い事業範囲」も持続性の観点で優れた優位性であるように思われる。仮にどこかしらの事業で失敗してしまったり、時代変化の潮流の中で行き詰ってしまったものがあっても、他の事業で業績をカバーしつつ新たな事業を模索するという戦略を取ることができる。そして新たな事業を発掘していくのに必要なナレッジを三井化学はその歴史の中で十分に培っている。そして現在三井化学が力を入れている分野について、これからの時代で必要とされていく可能性が高いものが多いということからも持続性を期待できる。

4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

労働者にとって、汎用的な人的資本を向上させる良い機会となると考える。

三井化学の手がけている業種は ICT などをはじめ今後必要とされる可能性の高いものが多く、さらに三井化学の長い歴史で培われたナレッジも鑑みると労働者にとって非常に魅力的なスキルアップの機会となるだろう。

5. 報告書にはどのような改善余地があるか

非常に内容の充実した報告書であり、私が実際にこの報告書を目にする前に期待していた内容（将来のビジョン、現在どのような事業を手がけているか、またその事業に関する簡単な解説、環境問題に対してどのような取り組みをしているか、など）がもれなく記載されており、またその内容も明快で理解しやすいものであった。

そんな中であえて改善点として期待できる点を挙げるとするならば、「外部評価」を新たな内容として組み込むことが思い浮かんだ。

外部評価は SRI インデックスへの採用など、株式市場において特に環境やガバナンスなどにおいて高い水準であると外部からの認定を受けるものである。私が調べたところ、実際に三井化学でもこれまでに「FTSE4good Index」や「MSCI 日本株女性活躍指数」など様々な銘柄に採用されてきている。これらの外部評価は投資家に加えてこれからの就職先を探す就活生から見ても魅力的なものであるので、内容の一端に盛り込むのも有効であるように思われる。

資料は

<https://jp.mitsuichemicals.com/jp/ir/library/ar/> より借用